



やっぱり自宅は落ち着くわ

最期の迎え方①

介護と人生

仕事・子育てと
どう両立させる？

日本エルダーライフ協会 代表理事
ケアライフアドバイザー

柴本美佐代

介護は永遠に続くものでありません。介護の終わりには被介護者が亡くなることですが、みどりについて考えてみたことはありませんか？

介護中の人に最期について考えてくださいというのは非情だと思われるかもしれませんが、早い時期からきちんと考えてほしいと思

っています。

医学が発達する前、人の死は選べるものではありませんでした。心臓発作や脳出血のような突然の病気で倒れば、運を天に任せるしかありません。また、痛みや呼吸困難、老衰に対しても手立てはなく、ただその時を待つことしかできませんでした。

ですが、今はこれまで諦めるしかなかった多くの命を救えるようになりました。そして苦しみを取り除くための緩和ケア医療や、老衰によるさまざまな障害に関しても延命の方法がある時代になりました。

自力呼吸ができない人には人工呼吸器、心臓が止まってもペースメーカー、食事を取れなくなっても胃ろうや高栄養の点滴で生きて

早い時期からきちんと考える

いるのと同じ状態を保つことができるようになったのです。現代は死をコントロールし、最期の迎え方を選択できる時代だといえるでしょう。選択する必要はない、1分1秒でも生きるのが常識だと思われるかもしれませんが、本当にそれでいいのでしょうか？

ある介護者は97歳の認知症のお母さんを介護していましたが、寝たきりになり、おむつをするようになってお母さんが食事を受け付けなくなりました。病気ではなかったのですが、本人の望まない入院と高栄養点滴で延命しましたが「母のためというより自分自身が母の死を受け入れられないから」と話していました。ずっと食事をさせる努力もしていましたが、肺炎を起し「家に帰りたい。天国に行きたい」というお母さんの言葉を聞き、それ以上の医療行為を諦め、穏やかな数日を過ごした後にみどりました。